価値がめぐるまちへ
― 住環境・公共空間・“迂回する経済”の都市論から

吉江 俊 先生（東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻講師）

「価値がめぐるまち」をテーマに、宮城県加美町でのまちづくりの取組と、民間企業と協働した都市開発事例を紹介。地域資源を活かし、住民・行政・企業が協働してまちの価値を創出することの重要性を提示。

講演内容（要約）

1. 自治体との共働によるまちづくり事例

宮城県加美町は2003年に3町が合併して形成された地域で、プロジェクト開始当初は住民間の交流が限定的であり、一体感の醸成が課題であった。そこで、まちの「景観」を手がかりに地域のアイデンティティを共有し、コミュニティ形成を支援する取組を行った。景観とは「目に見える風景」とそれを支える「住民の営み」によって成り立つものと捉え、調査を開始する。「住民の営み」を調査するうえで、まずは約 100 人の住民へのインタビューを通じて生活や歴史を聞き取り、口述史（オーラルヒストリー）を編纂した。さらに、町の風景調査も行い、31 枚のパネルにまとめて「巡回美術館」を企画した。これらの調査過程が地域住民との信頼関係構築の契機となり、まちづくりの第一歩となった。3 年目には本格的なプランニングの段階に入った。「まちづくり人生ゲーム」というワークショップを通じて、住民が年代や立場を超えて町の課題やアイデアを出し合う場を創出する。これにより行政への要求が明確化し、住民主体の「提案型まちづくり」が実現していった。さらに、中高生向け教材の作成や、衰退していた商店街にコミュニティレストランや特産市を設けるなど、地域拠点づくりの取組を実施した。

2. “迂回する経済”の実践

従来の「直進する経済」が短期的利益を追求するのに対し、「迂回する経済」は街の価値を維持・向上させ、長期的なまちの持続性に寄与するアプローチである。具体例として、小田急電鉄の下北沢線路街プロジェクトが挙げられる。通常の家賃相場とは異なる条件で若い店主や下北沢らしい店舗を誘致する仕組みや、新しい活動が生まれ続ける賃貸住宅の取組、植栽管理を住民組織に委託するなど、地域価値を循環させる仕組みを様々実践している。

質疑応答

Q.デザインの重要性を教えてほしい。

A.デザインは相反する複数の課題をうまく調整し、解決するための手段だと考える。例えば、経済性と公共性のように両立が難しい要素をどう共存させるかを考えることがデザインの役割になる。また、人々の考えを共有し、共感できる形に昇華するための方法としても、デザインは有効だと思う。

Q.直進的な発想で作られた都市計画に対して、迂回する経済による折り合いの付け方について何かサジェスチョンはあるか。

A.再開発などの大きな建物の開発では投資的なものが強くなりがちだが、ソフト的なアプローチも含めてまちを豊かにしていく方法を考えることができるようになってきている。物理的に都市ができていく経済とは違う次元で、ソフトなアプローチを重ねている事例はある。

Q.中高生向け教材は学校側には当時どのように受け止められ、現在も教材として利用されているのか。

A.現在では配布のみになっているが、当時は一緒に読み合わせをしたり、宿題として家庭内で話してもらう工夫も行った。

Q.都市計画の基での合意形成において大切なことを教えてほしい。

A.都市計画には「これが正解」というものはなく、対象の範囲を見極め、議論を尽くした中で最善の選択をし、時代に合わせて修正していくしかないと考える。合意形成における議論の過程をしっかり残しておいて、次の世代へのバトンを繋いでいくことが大事だと考える。